

## 重度の脳性麻痺六歳児の例

昭和五十三年五月十三日、重い脳性麻痺の六歳になる子が入所しました。その時の観察記録には、次のように書かれています。

言葉に対する反応が見られない。

右半身は完全に麻痺。左半身がわずかに動かせる。お座りも十分ともたず、倒れてしまう。這うこともできない。

物を直視することができず、瞳は左上方に上がってしまう。

この日まで、某病院の機能訓練と、市の障害児保育所で保育と言語治療を受けてきた。(途中の経過については省略)

十月十四日(五か月め)

名前を呼ぶと「アー」という返事が出るようになった。

泣き声の出るアスクミー・カードを機械に通して泣き声を聞かせ、先生が「泣いてはだめです」と叱るような語調で言うと、じっと耳を澄ませ、真面目な顔で先生の目を見つめる。

自分の名前の書かれているアスクミー・カードや、頭、肩、膝、足、お父さん、お母さん、姉たちの名前のカードをアスクミーに通すと、

じっと見て、わかっている表情、身ぶりをし、「アー」と声を出す。

「握手」と言われ、手を差し出されると、右手を持ち上げる。右の指が開いている。

まわりの人の目をじっと見て、その人の動きにつれて首を回し、注目する。

教師が「頭、目、口」と言いながら、その部分に触れようと身構えると、明らかにその部分の接触を待つ動きが見られた。

教師が「バイバイ」と言って戸棚の後ろに隠れると、目で追い、「バア」と言って出て来ると、声を上げて喜ぶ。

「さようなら」と言われると、左手をバイバイの形で振って、母親の方へ手を伸ばした。

母親の話によると、指導開始後三か月日の八月ごろから、「この子の目が光って、生き生きしてきた」と、知り合いの人からよく言われるようになった、とのことでした。

十月の初めごろ、保育所で、某大学の言語治療の先生と、その母親との面接がありました。その時、母親が「私の言うことに対して、そ

れに対する表情や動作から、この子は言われることがわかるようです」と言うと、その先生は、「この子にわかるはずがない」と主張して、譲らなかったそうです。

ところが、その時、その子は床の上に置かれていたのですが、三メートルも腹這いで前進し戸を押し開けて、声を上げて受持ちの先生を呼んだそうです。それで言語治療の先生は、「あれ、この子は二人の話が面白くないので、あそこまで行ったのかな。この子は言葉がわかるのかな」と初めて、そう言ったそうです。

漢字を指導する私どもには、それが言葉として発音できるずっと以前から、ちゃんと理解できることを知っています。どんな重障害児でも、漢字を理解でき、話し言葉は言えなくても、内言にはなっているという判断をしていますので、子供たちに対する姿勢も、自然と違うようです。

一般に、治療とか 訓練とかと言われる先生には、専門的な技術の点では優れたものをお持ちの方が大勢いらっしゃると思います。しかし、障害児教育に限らず、教育というものは、その方法がただ一つだけしかない、というわけのものではありません。

ある教育法は、とても有効だとしても、その用い方によっては、また、その子供によっては効果に違いも出るでしょう。また、それに、子供がその気にならなければ、私たちが期待するだけの結果は得られないと思います。そして私たちに、子供がその気になるだけの愛情と工夫がなければ、どんなに有効な方法も、まったく価値のないものに終わってしまうことでしょう。